

東京大学大学院 人文社会系研究科 次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣帰国報告

様式1 (研修の概要)

- (1) フランス・パリ・パリ高等師範学校・Ecole d'été internationale (夏期大学)
- (2)

出発日：2010年7月16日

帰国日：2010年8月9日

総日数：24日

- (3)

履修した授業：Anthropologie (人類学), Sociologie (社会学), Atelier d'enquête de terrain (フィールドワーク)

参加した行事：Visites guidée (ガイド付きの訪問) ; La cité des Courtilières (パリ郊外訪問), La cité de L'immigration (移民史料館)

様式2-1 (自己評価日本語版)

(1) 社会学や政治学を受講し、「アトリエ」において研究調査を受講することでフランスの社会学、政治学の手法に触れ、授業で紹介されるテーマを入り口として、滞在期間中にパリでの移民労働者を観察し、インタビューなどの形で接触することで CAI (Contrat d'accueil et d'intégration、受け入れ統合契約) の実態を調査したい。

また、フランス語で学問を出来るレベルのフランス語訓練をすることはもちろん、この授業の中で外国人にどのようにフランス語が教えられるのかを体験したいと思う。

これらを通じてフランスの移民への言語教育が移民の社会への受け入れや生活安定に有効に働くのか、また役に立つとすればどのような面で役に立つのかを研究したい。

(2) 社会学での今年のテーマ、Sociologie de Paris (パリの社会学) の受講を通じて、誰がパリに住んでいる人の多様性を様々な面 (土地の値段、階層、政治、教育など) からみることが出来た。なかでも移民の多く住む地域はパリの多様性を象徴しており、授業の中では、6つほど取り上げられた移民街を実際に訪れて、その地域の商店や宗教施設で働く人、住人を観察し、インタビューをする機会があった。残念ながら語学力が足りず、計画していたことをすべて聞くことが出来たわけではないが、実際に移民街を訪れることで今まで抱いていたイメージとは違うフランスの移民の生活を見ることが出来た。移民の中にも多様性があり、北アフリカ系等フランス語に全く問題の無い移民から、タミル系などフランス語に不自由する移民もあり、それぞれの共同体の *entre-soi* (閉鎖性) の度合いも異なっていた。

フィールドワークのアトリエは社会学の授業と連携しており、様々なパリの姿を、主に「再

開発」や「住居」という面から調査した。低所得者向けの **logement social**（社会住宅）が多く建つ地域や高級住宅街、再開発の進む近代的な地域などを歩き、その地域にいる人にインタビューをした。社会住宅に関して、マイナスのイメージをもっていたのだが、実際に訪れると新しく、住みやすそうな建物で、建っている地域の雰囲気もさほど悪くはない印象を受けた。

実際に移民の生活の場を見ることで、言語教育以外にも、住居の提供や隣人トラブルの解決の手伝い、文化支援など、様々な受け入れ支援の形があると分かった。

（3）語学力が十分でなかったことが大変もったいなかった。授業に関しては予習をすることで理解することが出来ても、実際のフィールドワークの場で話される様々なフランス語を満足に聞き取ることが出来ず、聞きたいことを聞けないこともあった。しかし、分かる範囲での交流や実際に目にしたのから得るものは多く、普段観光では訪れないような郊外や、移民街に足を運ぶことが出来たことは今後の研究を組み立てる上で役立つと思う。

大変小さな首都であるパリの中に、違う国に来たかと思うほどの多様性があることに驚き、いいな、と思う反面、フランス社会に溶け込まないことの怖さを感じた。フランス共和国の原則には「公的空間での平等な個人」というものがあるが、母国語も肌の色も宗教も異なり、住む場所も分離しているパリで、この「平等な個人」を想定するのは現在大変難しいと思う。これに関して、フランス国籍をもつ人がどう思っているのかに大変興味があり実際に聞いてみたところ、「公的空間での平等な個人は幻想」と答えていたのが印象的だった。確かに多様性のある都市であったが、うまく共生しているのではなく、まだまだ分生の状態なのだと分かった。今後フランスがどのように多様性を認めて、多様性を乗り越えていくのか興味がある。

同じ時期に夏期大学に参加していた学生の質も高く驚いた。英語のほかに、第二外国語として早くからフランス語を学習している人達ばかりで、大学からフランス語を始めた私がかかわらないのは当然だった。けれどプログラム名に「次世代人材育成」とあるように、今後国際的に活動するのであれば語学は避けて通れない問題であるので、今後は自分の専門分野だけでなく英語、フランス語の勉強にも力を入れてゆきたい。

フランスに行くことで語学力が 3 週間で劇的に変化することはなかったが、学習した分野の語彙は増え、耳も少しはフランス語になれることが出来た。

学部生で一番語学力は不足していたし、授業のレベルの高く苦労はあったが、なにより、普段本で読み頭で考えたことを、実際に体験する機会をもつことが出来、知っていることを手掛かりに新しい印象や発見をたくさん得ることが出来て良かったと思う。